

機関番号：14401

研究種目：若手研究（A）

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20682001

研究課題名（和文） 哲学対話における反省的・協働的思考：学年と専門を横断する対話学習プログラム研究

研究課題名（英文） Reflective and Collaborative Thinking in the philosophical Dialogue

研究代表者

本間 直樹 (HOMMA NAOKI)

大阪大学・コミュニケーションデザイン・センター・准教授

研究者番号：90303990

研究成果の概要（和文）：哲学対話とは他者との対話（問答）を繰り返しながら自分で考え、その考えをさまざまな観点から見つめ直すという実践活動である。初等中等教育において実施されている海外の哲学対話教育の調査をもとに、思考の反省と協働が営まれるための学習者中心の対話学習プログラムを作成し、それを小学校から大学までの幅広い教育現場に応用し、試行を重ね、改善と検証を行った。

研究成果の概要（英文）：The philosophical dialogue means a set of skills in reflective thinking through the mutual questioning in collaboration with others. This research built up a learner-centered program for reflective and collaborative thinking and put this program to trial by its application to the elementary and higher education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
総計	5,100,000	1,530,000	6,630,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 ・ 哲学・倫理学

キーワード：哲学対話 哲学教育 協働的思考 こどもの哲学 学習プログラム

1. 研究開始当初の背景

（1）初等中等教育の場で対話を通して哲学を学ぶ試みは世界の各地で試みられている。にもかかわらず、日本の初等中等教育のなかで、現在そのような学習の機会が十分に提供されていないばかりか、大学での哲学・倫理学の教育においても、対話の学習を中心とした教育・学習プログラムの実践研究はほとんどなされていない。報告者はこれまでに Philosophy for Children（こどものための哲学：P4C と略称される）と呼ばれる海外の教育実践について調査を続けると同時に、それぞれの文化的背景のなかで編み出された

教育プログラムをそのまま日本に紹介・導入するのではなく、それらを参考にしながら、「こどもの哲学」という新しい名称のもとで、学校教員らとともに哲学対話の理念と学習法について検討を重ねて来た。

（2）初等中等教育における「こどもの哲学」の具体的な内容に関する検討を重ねるなかで、この内容が初等中等教育だけでなく、高等教育においても学年や教科・専門の枠を越える対話学習のプログラムとして応用可能であるとの展望が見えて来た。

2. 研究の目的

(1) 本研究のベースとなるのは「こどもの哲学」である。マシュー・リップマンやアン・シャープによって創出され、各地に広められている Philosophy for Children のカリキュラムにおいては、教えられるべき thinking skills を予め想定し、それを段階的にこどもに習得させるという〈教える—習得〉モデルが前提されていた。しかしジョン・デューイの教育思想においては、こども＝学習者から学ぶという点が強調されている。したがって、「学習」および「学習者」を中心に据えた〈学ぶ—分かち合う〉のプロセスを重視し、学習者の気づきや発見によって生まれる哲学として（名称も新たに）「こどもの哲学」の意義を確認する必要がある。また、「こどもの哲学」の具体的な内容は「哲学対話」である。哲学対話とは、哲学者によって書かれた対話篇ではなく、他者との対話（問答）を繰り返しながら自分で考える、自分の考えをさまざまな観点から見つめ直すという実践活動を指している。本研究では、この二つの点から思考の反省と協働が営まれるための「対話学習プログラム」を考案し、実際の教育現場で試行を重ね、その検証を行うことが目的となる。

(2) 上記の対話学習プログラム作成を目的とした場合、以下の5つが研究課題としてあげられる。

- ①対話を通じた協働的学習過程においてどのように反省的・批判的思考が働くのかについて、観察と分析を通して考察する基礎研究
 - ②初等・中等・高等教育の各場面で、教科ないし専門教育に並行して行われる対話教育の意義に関する研究
 - ③哲学学習者・研究者に求められる対話進行役能力に関わる実践的研究
 - ④学習—教育プログラムのデザイン（学習ツール開発、学習環境、組織連携など）に関する研究
 - ⑤学習のためのカリキュラムとプログラムに関する海外調査、とりわけ欧米圏以外の、環太平洋圏における哲学対話教育の状況調査。
- なお、これら5つの課題については、本研究の規模・期間内ですべて完遂することは難しいと予想されるが、5つそれぞれに着手し、足場を固め、将来の研究課題のための基礎作りを目指す。

3. 研究の方法

上記、研究の目的と課題のために、より具体的な5つの作業を行う。

(1) 初等中等教育における総合的学習の時間、道徳の時間などを利用した教科横断型の

対話学習プログラムを教員らとともに検討し、実施と検証を重ねる。対話のプロセスを記録し、分析を行う。

(2) また、学年と専門を横断する対話学習のための基礎プログラムを大学および大学院において実施する。

(3) さらにこのプログラムを修了者が、実際に初等中等教育の現場でこの基礎プログラムを応用した授業を自ら行うことで、「対話進行能力」を実践で磨く環境を準備するとともに、学習プログラムそのものの発展と再検証を狙う。

(4) 国際学会・ワークショップなどを通して、これらの実践について国内外の Philosophy for Children 実践者・研究者とともに検証・評価する。

(5) 哲学対話の学習のための教材・資料集、および学習過程の映像アーカイブを作成する。

4. 研究成果

(1) 兵庫県西宮市の小学校と協働して、研究授業、および教員が参加する哲学と対話教育に関する研究会を毎年開催し、小学校での教科横断型の対話学習プログラムの有効性を確かめるとともに、どのようにして教員の手によってこうしたプログラムがカリキュラムに導入可能となるのかについて検討を行った。

(2) 上記の成果として、教員の助力を得ながら総合的学習の時間などを活用したすべての学年にまたがる対話学習プログラムを考案し、国語、環境教育、美術教育、道徳教育の教科を横断する授業を各学年で実施・検証した。(以下の図と写真を参照)

図 小学校で実施した対話学習プログラム「こどもの哲学をベースにしたカリキュラム案——「ともに考える」こどもを育てるために」より

学年	教科／枠組	内容・方法
1・2	国語	具体物とフラフープを用いた対話を行い、話す-聴く-理由を言うの基本を学ぶ。(写真1)
3	総合／環境学習	校外学習の前後に自らの体験や疑問について話し合う時間を設ける。こどもたちと地域ボランティアとの対話を図る。
4	総合・道徳	相互質問法を使って「質問ゲーム」を行う

5	総合／美術鑑賞	現代絵画を前にサークルになり、コミュニティボールを使って話す。(写真2)
---	---------	--------------------------------------

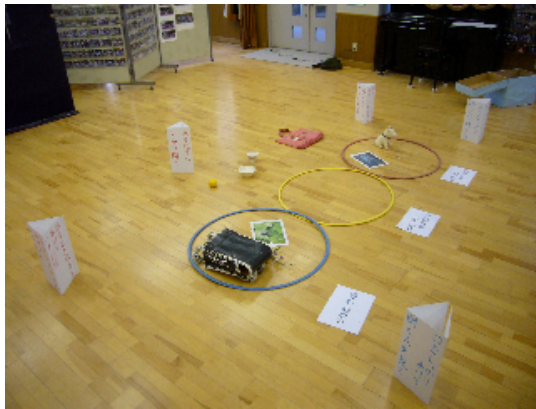


写真1 具体物とフラフープを使った授業



写真2 現代絵画をめぐる対話

(3) 高等教育における哲学教育に関する研究会を開催し、大学での哲学・倫理学教育の実際の報告、異分野・異職種のあいだでの対話方法論、カリキュラム、教材などについて具体的に検討を行い、授業実践者のあいだで教材の共有を試みた。また、日本倫理学会などの「ワークショップ」の場を通して、対話法について実演と解説・議論を試みた。こうしたプログラムの公開や教材の共有については、大学を越えた「ファカルティ・ディベロップメント (FD)」として今後も継続的に図られるべきである。

(4) 専門・学年の異なる大学生・大学院生対象に、ネオ・ソクラティックダイアログ、相互質問法ほか、実践者によって開発されたさまざまな対話手法を導入した対話進行役養成プログラムを大阪大学において毎年実施し、毎回内容の改善を図るとともに、最終年度は受講者インタビュー等を通してプログラムの検証を行った。

(5) 受講者には「哲学カフェ」(市民のための哲学対話の場) など、学外での進行役実践トレーニングの場を提供し、学習プログラムの拡張を狙うとともに、受講生に高校での哲学対話学習プログラム自ら計画・実施してもらうことにより、学習者による学習の展開を実験し、その記録観察および検証を行った。

(6) オーストラリア、メキシコ、アメリカ・ハワイ大学など、太平洋圏における独自の先進的取り組みを調査・視察し、とくに多文化社会における哲学・道徳教育の現状と課題を把握した。また、こどもたちとの哲学の探究を推進する国際組織、International Council of Philosophical Inquiry with Children (ICPIC) など主催する、国際学会・ワークショップにおいて、小学校、高校、大学でのそれぞれの学習プログラムの内容を紹介、および成果を報告し、哲学対話の協働的学習に関する討議を行った。

(7) これまで実施されたプログラムに対してこれまでの思考と学習に関する基礎研究をもとに考察を加え、以上の課題に対する成果をまとめた報告書「哲学対話と対話学習プログラム」を作成し、関係者・協力者等に配布した。また、研究授業の映像記録を行い、授業実施者のための映像アーカイブを作成した。アーカイブの公開方法は、今後の検討課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

① 本間直樹、教えない授業は可能か——対話学習と対話進行役養成プログラムにおけるネオ・ソクラティックダイアログの活用、臨床哲学、査読有、12巻(2011)、31-46.

② 本間直樹、高橋綾、「どっちに入るかな? フラフープを利用した授業から——小学校で哲学する(2)、臨床哲学、査読有、12巻(2011)、71-91.

③ 本間直樹、何が思考を呼び求めるのか? ——こどもと哲学のあいだ、メタフュシカ、査読無(招待)、40巻(2010)、1-11.

④ 本間直樹、高橋綾、小学校で哲学する——オスカル・ブルニフィエの相互質問法を用いた授業、臨床哲学、査読有、11巻(2010)、70-80.

〔学会発表〕(計2件)

1. Naoki HOMMA, Aya TAKAHASHI, Thinking beyond the evaluation, 14th ICPIP International Conference, Padua

University, Italy.

2. Naoki HOMMA, Aya TAKAHASHI, Thinking Skill and Thinking Subject, 12th International Conference of Philosophy for Children, 2009.1.9, San Cristóbal de las Casas, Chiapas, Mexico.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本間 直樹 (HOMMA NAOKI)
大阪大学・コミュニケーションデザイン・
センター・准教授
研究者番号：90303990

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

高橋 綾 (TAKAHASHI AYA)
大阪大学・文学研究科・特任研究員
研究者番号：50598787

トーマス・ジャクソン (THOMAS JACKSON)
ハワイ大学・教授

(4) 研究協力者

中川 雅道 (NAKAGAWA MASAMICHI)
大阪大学大学院・文学研究科・博士前期課程

樫本 直樹 (KASHIMOTO NAOKI)
大阪大学・コミュニケーションデザイン・
センター・招へい研究員

松川 絵里 (MATSUKAWA ERI)
大阪大学・コミュニケーションデザイン・
センター・特任研究員

金澤 正治 (KANAZAWA MASAJI)
西宮市立香櫨園小学校・教諭